

二つの運命

小川未明

青空文庫

風の出かぜそでうな空模様そらもようの日ひでありました。一いちびきのせみが、小ちいさなこちように出であいました。

「なんだか怖おそろしいような空模様そらもようですね。今こんや夜はあれるかもしれませぬ。早はやく家うちへ帰かえりましよう。」と、せみはいいました。

正しょうじき直ちきなこちようは、空そらを見み上げて、

「ほんとうに暗くらくなりました。あんなに雲くもゆきが早はやうございます。早はやく家いえへ帰かえりましよう。」と答こたえました。

そこで、ふたりは、風かぜに吹ふかれながら空そらを飛とんできましたが、小ちいさなこちようは、おくれがちなので、せみはもどかしく思おもいました。

「こちようさん、あなたのお家うちはどこですか。」とききました。

「私わたしの家うちは、あちらの花はな圃ぼたけです。あすこには姉あねいもうとも妹いもうともきて待まっています。」と答こたえました。

「あんな頼たよりのない花はな圃ぼたけなんですか、今こんや夜の大おお風かぜをどうして、あんなところで防ふせぐことができますか。」と、せみはあきれたような顔かおつきをしました。

「こちようは、また空を見上げました。ますますものすごく空の景色はなっていくばかりです。」

「あなたのお家は、どこですか。」と、こちようはせみにたずねました。

「私の家ですか。それは大きな木です。もうすこしいくと、その木が見えるはずですよ。こもりとしげっていて、風や雨が、めつたにさらすものではありません。どんな大風が吹いても、それは安全なものです。私たちには、とてもあなたのようなおぼつかない生活はできないのです。」と、せみは得意になつて答えました。

あちらには、黒いこんもりとした大きな木が見え、こちらには、きれいな花のたくさん咲いている花圃が見えました。二人は、別れなければなりませんでした。

「そんならこちようさん、今夜をお気をつけなさいまし。また、ふたりが無事でしたら、お目にかかりましょう。」と、せみはいいました。

「あなたも、どうぞご機嫌よう。私は、あなたの幸福を神さまに祈っています。」と、こちようはいいました。そして、右と左に分かれていきました。

「ほんとうに、あの哀れなこちように、ふたたびあわれるだろうか。」と、せみは途すがら考えました。

はたして、その夜の暴風雨といったら、たとえようのないほど、ものすごかったのであります。せみは、大木に止まっていましたが、幾たび振り落とされようとして、びつくりしたかしれません。そして、ろくろく眠ることすらできなかつたのです。しげった枝の間から、雨は落ちてきました。大波の打ち寄せるように、また水の泡だつように、葉は音をたてて騒ぎました。せみは不安で生きているような気持ちではしなかつたのです。「かわいそうに、この暴風雨で、あのこちようは死んでしまつたらう。」と、せみは、怖ろしいうちにも、こちようのことを思い出していました。

翌日、雨がはれ、風が止むと、せみは花圃の方へこちようのようすを見ようと飛んでいききました。そのとき、ちようど彼は、こちように出あいました。

「ご機嫌よう。」と、こちようは、せみに声をかけました。せみは意外に思ったような顔つきをして、

「昨夜は、なんともありませんでしたか。」と、たずねました。

「たいへんな暴風雨でございましたね、みんなは抱き合つてふるえていました。私はどうなることかと心配しましたが、それでもみんなは無事でございました。お日さまが出られたので、このとおり元気になりました。」と、小さなこちようは勇んでいいました。

せみは、心の中でこちようを不憫に思いました。昨夜は、幸いに助かったが、このつぎの暴風雨のときには、きつと花は散り、こちようは死んでしまふだろう。それに気づかないとはかわいそうなものだと思いました。

「こちようさん、だんだん秋が近づいてきました。みんなが死を考へなければならなくなりました。」と、せみはいいながらも、自分だけは、あの大きな木のしげった中に身を隠していれば、寒くなつたつて、そんなに怖ろしいこともないだろうと思つていたので。

「私は、寒くなることを考へると身ぶるいします。私のすみかにしています、あのやさしい花が散る日のことを考へると私は、身を切られるように感じます。」と、こちようは怖ろしさに身を震わしていいました。

「おたがいに、こうして達者でいましたら、またお目にかかります。いまのうちに、うんとあなたは舞つたり、踊つたりなさいまし。」と、せみは、こちようをかわいそうに思つて、こういつて、なぐさめまして、いづくへともなく立ち去つてしまいました。

日にまし、風が強くなつて、いままで南から吹いたものが、西から吹き、北から吹くようになると、遠い、高い山の雪の上を越えてくるとみえて、風は、冷たく、寒くなりしました。こちようは心配げに見えたのであります。

元気よく鳴いているせみの声は細っていききました。この世の中が急にこんなに変わりま
したので、ふたりは、もう、たがいに出あつて物語をするようなこともなかったので
す。

それは、みんなの虫類にとつて、このうえもない怖ろしい霜の降つた日のことです。
夜が明けると、あたりは音もなく静まりかえつて、草や木の葉はみんな白くしおれていま
した。そして、すべての虫がたいてい、夜の間で死んでしまつたらしいのです。

その大きな木の下には、自分だけは生き残ろうと空想したせみが死骸になつて地の上
に落ちていました。そして、はや、小さなありどもが、どこからかその死骸をかぎつけて
きていました。

花圃にいつてみると、無残にも花は頭を地につけて見る影もなかつたけれど、まだ
小さなこちようは抱かれています。こちようとは花は最後まで助け合つて、運命に身を
まかせていたのです。花に止まつたこちようは破れた羽をかすかに動かして、いまにも太
陽の上のを待つていたのでした。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 2」講談社

1976（昭和51）年12月10日第1刷

1982（昭和57）年9月10日第7刷

※表題は底本では、「二つの運命《うんめい》」となっています。

入力：ぷろぼの青空工作員チーム入力班

校正：江村秀之

2013年11月5日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

二つの運命

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>